

シカゴ市公園研究の問題と視角

川口 晋一*

本小論は、米国シカゴ市における資本の集積過程に起因する都市的な拡大、特に労働移民の集住や住み分け、またアメリカ社会への同化といったこととの関わりで重要であった「公園」に注目し、研究を進める上での問題と視角について論じたものである。まず、その前半部分では現在シカゴ市に592存在する公園の設立時期を特定し、それぞれのZIP code（郵便番号）と住所から所在地を割り出す作業をもとに、公園整備の状況や公園に併設されたスポーツ・レクリエーション施設の数量と分布などを見るなかで、その特徴や問題、重要な研究課題について論じている。後半部分では、シカゴ市の発展と公園行政の動向をふまえて具体的に、①公園の物理的な配置を都市計画との関わりで見えていくこと、②公園行政における移民対策の問題として併設施設や提供されるプログラムサービスを見ていくこと、③移民がアメリカ社会と交わる場所として、「アメリカ化」に関わった「意味空間」として公園を見ていくこと、の3つの視点を提示した。

キーワード：シカゴ市、公園、スポーツ・レクリエーション施設、移民、アメリカ化

目次

はじめに

1. シカゴ市における公園配置の現況

(1)研究方法

(2)公園の設立年次と分布

(3)公園併設施設の状況

2. 都市計画の思想と公園の物理的配置

3. 移民対策のための公園行政

4. 意味空間としての公園

おわりに

はじめに

シカゴ市は現在、全米で第三の人口規模を持つ大都市であり、ロスアンジェルス市に抜かれるまではニューヨーク市に次いで第二位の都市

であった。その都市的な拡大は19世紀後半から20世紀初頭にかけて、南および東ヨーロッパからの移民の流入およびアメリカ南部からアフリカ系アメリカ人が移住することによって、数十年という極めて短い期間で達成されたものであった（表1参照）。まさに資本主義の拠点として発展したシカゴ市は、ニューヨーク市以上に都市大衆文化の成立にとって重要な研究対象であるといえるだろう。

一方でシカゴ市は、その発展に伴い様々な社会問題を孕んできたが、シカゴ学派を中心とする社会調査のフィールドとして、またハル・ハウス [Hull-House]¹⁾ などのセツルメントの拠点として社会改良主義の運動が盛んであったことでも知られている。いわば常にその実態把握と計画的な問題解決が追求されてきた都市であ

* 立命館大学産業社会学部准教授

表1 シカゴ市の人口動態

年	人 口*
1830	100
1840	4,470
1850	29,963
1860	112,172
1870	298,977
1880	503,185
1890	1,099,850
1900	1,698,575
1910	2,185,283
1920	2,701,705
1930	3,376,438
1940	3,396,808
1950	3,620,962
1960	3,550,404
1970	3,369,357
1980	3,005,072
1990	2,783,726
2000	2,896,016

* 1830年の人口は概数である。

1840-2000年：合衆国センサスによる。

った。そこでの都市計画，社会事業は他と比べても極めて大きな意味を持つものであったし，公共空間として重要な意味を持った当時の公園を研究する意義は大きい。

さらに，現在でもコミュニティが民族のモザイクのように存続し，それに合わせるかのように近隣公園が分布している。また，大規模に市の財政を投じて行われてきたシカゴ公園局[Chicago Park District]の取り組みは，20世紀に入ってから連続性を持って捉えることができるものである。その組織による公園経営ならびにそこに併設されるスポーツ・レクリエーション施設の維持，またそこで行われるプログラムサービスの運営は，全米でもその動向が注目さ

れ，高く評価されている。

市政施行以降のシカゴ市の発展と公園の配置・整備の動向を追い，それを跡づけることは，そこで生活した人々にとって公園そのものやレクリエーション活動，またスポーツに求めたものが何であったのか，逆に行政や権力がそういった要求をどのように捉えて移民とそのコミュニティを組織化していったのか，また，レクリエーション活動やスポーツそのものがその場で如何に作用し，意味や価値を生み出したのかなど，実に多様で興味深い問題を含んでいる。本小論はそういった問題意識の中で，研究の方向性を提示しようとするものである。その前半部分ではシカゴ市公園の設立時期と配置の関係を見ることで現在に至るまでの発展上の特徴を概観しつつ問題と課題を明らかにし，後半部分ではそれらを扱っていく時の視角を提示しようとするものである。

1. シカゴ市における公園配置の現況

(1)研究方法

本小論では，シカゴ市に存在する公園の数を2007年12月の時点で592とした²⁾。シカゴ公園局が管理する公園は，それぞれが野球場，フィットネス・センター，水泳プール，テニスコート，体操場，ボクシング施設，運動広場，噴水プール，水遊び場，会議室，講堂，体育館，遊歩道（ジョギング，ウォーキング，サイクリング），ゴルフ場（ドライビング・レンジ，ミニゴルフ場を含む）などの施設のいずれかを単独で持つか或いはそれらを併せ持つ。

現在のところすべての公園所在地を地図で確認できる資料が存在しないため，公園の住所録を作成し，それを ZIP code（＝合衆国の郵便番

号)³⁾を利用しておよそその地理的な位置を特定し、公園の分布状況の把握に努めた。その際に、シカゴの中心街・ループ⁴⁾などから数回にわたって拡張した市の境界線など、歴史的・社会的に意味のある分類として、中部東、中部西、北部、南東部、南西部の5つにブロック分けをした。ただし、コミュニティ・エリア⁵⁾の境界ではなく、その近くにあるZIP codeの境界を使用したための誤差についてはあらかじめ記しておく必要があろう。コミュニティ・エリアという、地域として意味のある境界とは違い、ZIP codeは郵便配達機能上の便宜的区割りである。今回はあくまでも公園の配置状況を捉えることに主眼を置き、不都合が生じた場合には微調整を測るという手法を採った。実際のブロック分けは図1と図2に示したが、南北はState Street、東西はDiversey Avenueと55th Streetを通る線に最も近いZIP codeの境界線を採用した。

(2)公園の設立年次と分布

以上のような手順をもって、100年以上に及ぶ公園配置の鳥瞰図を得ることを目的に、ブロックと設立年別の配置を取り上げて以下に考察を加える。592の公園と併設された施設の数と5つの区分けで分類整理したものが図3である。先ほど示した図1と2を見ても分かるように、ブロック間の土地面積に違いはあるが、そういった点を考慮すれば中央東が少なくはない。しかし、南部が相対的に少なく、南部東も南部西も北部や中央西に比べると圧倒的にその公園数と施設数の合計で下回っている。人口分布のデータをみても（City of Chicago, 2007a）、中部西に比べても南部の東西に人口はより集中している。この数量的な格差は、南部

に面積の大きい公園が集中しているとは考えにくい状況の中で、今後年次別の公園設立経緯やスポーツ・レクリエーション施設の状況などを含めて更に詳細に検討を必要とする課題であろう。

次に、図4において公園の数を設立年代別にグラフ化した。1900年代に急激に公園設立の動きが活発になっているのが分かる。これは、後述するような小規模の近隣公園が居住区のなかにつくられるようになったことと関係があると考ええる。また、1930年代から第二次大戦中まではその数が目に見えて減少している。これは、1929年大恐慌の後、失業者対策として公園や運動広場の建設に労働者が多数雇用され、公園数を飛躍的増大させた全国的な潮流と逆行している⁶⁾。しかし、実際の投資はミシガン湖岸の埋め立てや湖岸道路の建設に対して行われていたことが、公園数が伸び悩んだ原因であろう。居住区の公園や運動広場の建設が行われなかった経緯については改めて分析をして評価を加える必要があろう。1930年代設立の公園は25であるが、そのうち9つは1934年に集中している。これは、この年にシカゴ公園局が大恐慌によって破産した私的な22の独立公園組織を統合して生まれ、すでに存在していた公園がシカゴ公園局のもとに公的なものとして組み込まれたからである。こうした公園行政の一本化についての組織再編は極めて複雑な動きをしているが、シカゴ市の公的レクリエーションを考える上で正確な理解が求められる。今後の重要な課題としたい。さらに特定の公債、基金、特別会計によってつくられた公園や、他の公的機関から移管された公園・プレイロット⁷⁾（遊び場）がいくつか存在している。これらの動向も押さえていく必要があろう。

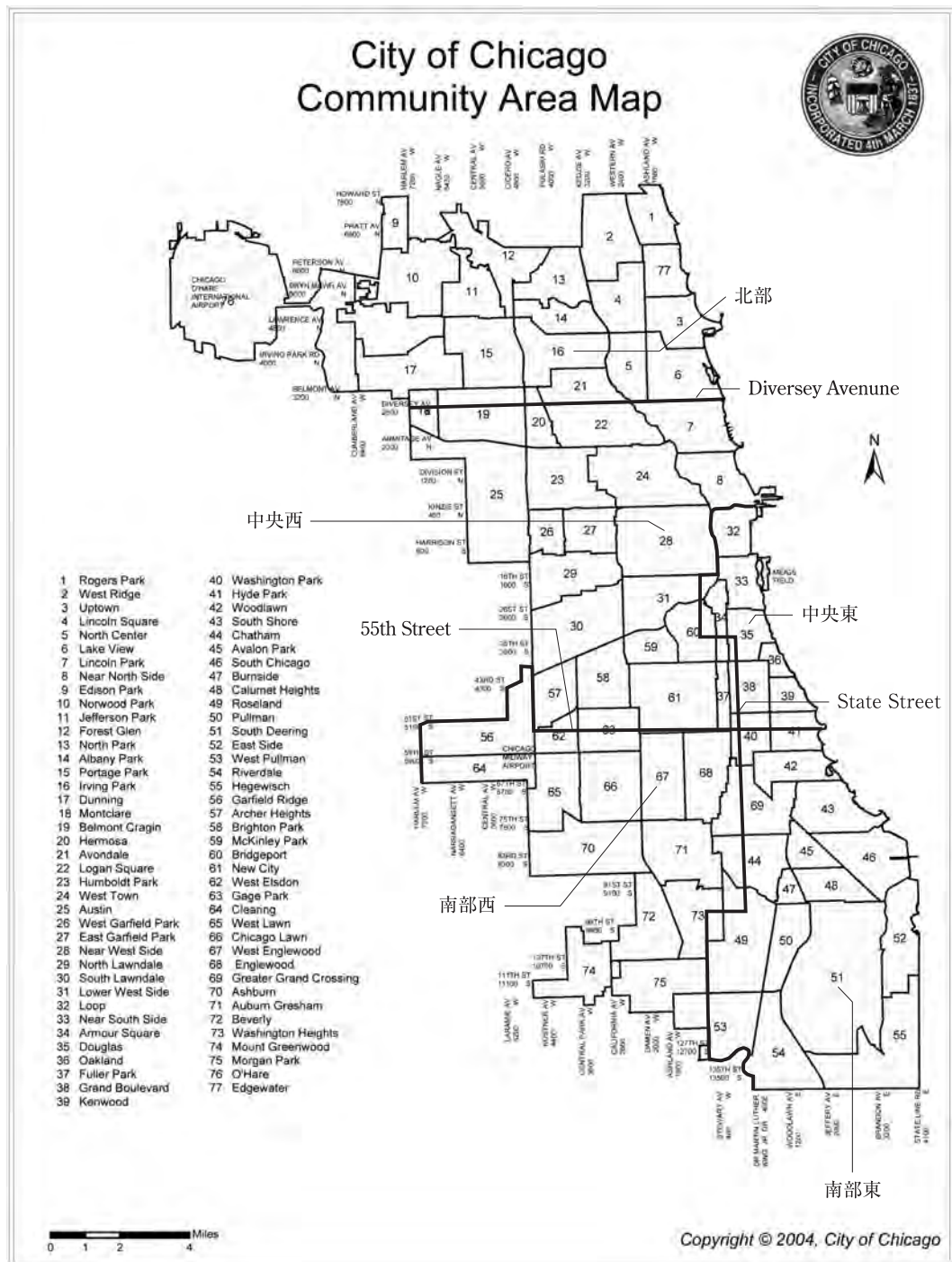
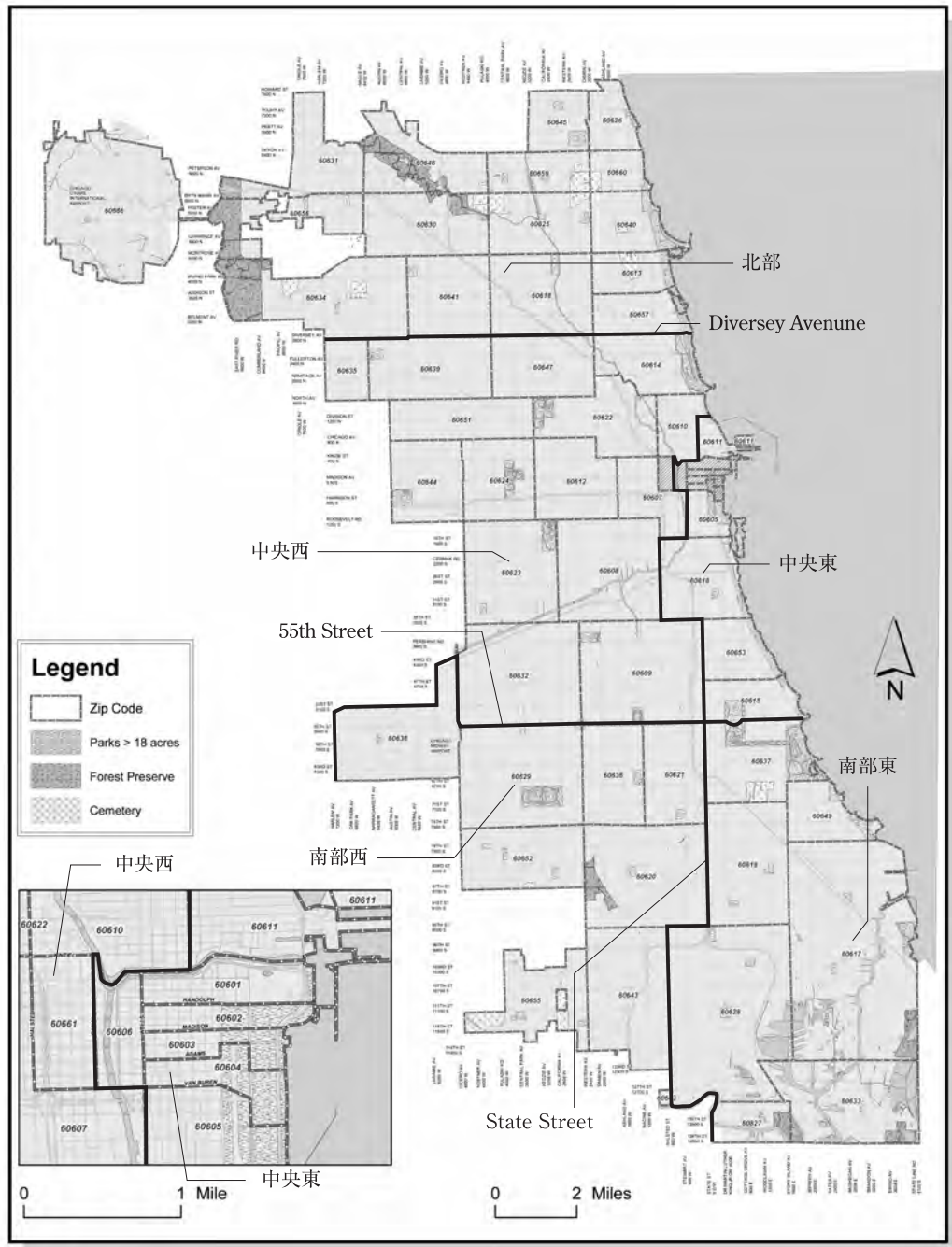


図1 シカゴ市コミュニティ・エリア地図
(太線は筆者による区割りの書き込み)



Zip Codes



CITY OF CHICAGO
RICHARD M. DALEY
MAYOR

April 2004

図2 シカゴ市 ZIP Codes 地図
(太線は筆者による区割りの書き込み)

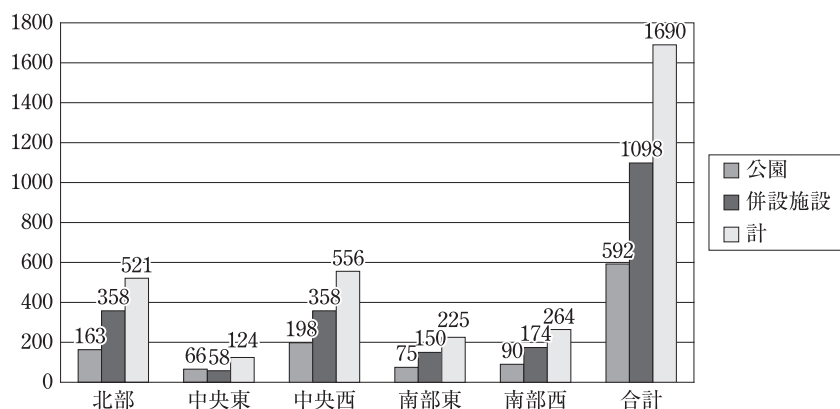


図3 ブロック別公園・併設施設数

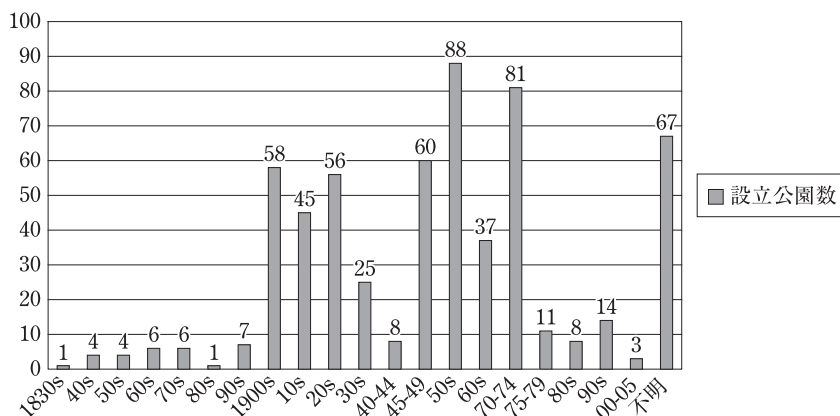


図4 年代別設立公園数

1960年代には公園の設立数が相対的に少なくなっているが、戦後から1970年代前半にかけてはその数が飛躍的に増加している。この点は問題としておさえておく必要がある。シカゴ市では戦後、スラム化が進行し、大規模な都市更新・再開発事業が市内の随所で行われた。シカゴ市の人口は1950年のセンサスで350万人を超え、それ以降は減少傾向にあるが、その後も施設は増え続けていることが分かる。このことが、戦後から1970年代にかけての労働力不足を補うためのスペイン語系移民の倍増と関係があるかどうかなど、考察すべき問題は数多くあ

る。シカゴ都市圏がこうした新たな移民の流入と、アフリカ系アメリカ人以外の中・上流層の郊外への移転によって拡大傾向にあったことも押さえておかねばならない。また、1970年のシカゴ都市圏における平均所得を世帯あたりでみると、市内の貧困な地区と郊外の富裕な自治体では、ほぼ1対8以上の格差があり、引き続き民族のモザイクを残して住み分けが残っていることも確認できる。こうした実態と公園の設立、公園に併設されたスポーツ・レクリエーション施設の変動、そしてそこに集う人々の活動実態を分析していくことが課題となろう。

表2 ブロック別公園設立年

設立年 ブロック	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940- 1944	1945- 1949	1950s	1960s	1970- 1974	1975- 1979	1980s	1990s	2000- 2005	不明	計
北 部	0	0	0	0	1	0	1	7	21	24	10	1	19	23	2	21	5	3	4	0	21	163
中央東	1	2	2	1	0	0	1	4	3	8	2	0	1	8	12	5	2	2	5	0	7	66
中央西	0	3	2	3	5	1	3	23	12	12	8	4	12	33	11	35	1	1	4	2	23	198
南部東	0	0	0	2	0	0	1	16	2	6	2	2	9	9	10	8	1	0	1	0	6	75
南部西	0	0	0	0	0	0	1	8	7	6	3	2	18	15	2	12	2	2	1	1	10	90
合計	1	5	4	6	6	1	7	58	45	56	25	9	59	88	37	81	11	8	15	3	67	592

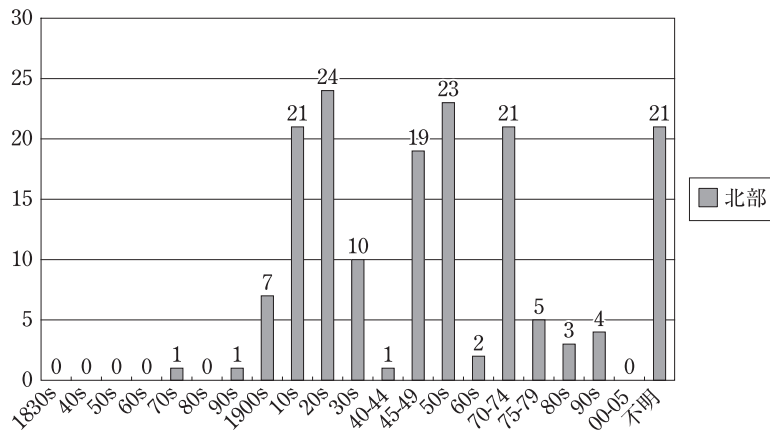


図5 北部公園設立年

次に公園の設立年をブロック別に見ることでその地理的な発展とブロックごとの特色を概観してみる。シカゴ市がその都市の境界を19世紀後半から20世紀初頭にかけて拡張してきたことを考えれば当然のことではあるが、表2および図5、6、7、8、9を見てみると、中央東のブロックから公園がつくられ、その後放射状に中央西、南部東、北部、そして1890年代に入って南部西に最初の公園がつくられたことが分かる。1900年代には中央西と南部東が数を増やし、1910年代から1920年代にかけては北部が急激にその数を増加させ、公園の合計数で中央西を抜いて一気に北部ブロックの数が増えた形になる。ここまでの公園の動向は、1860年代にブロックの東部と西部を区分けする State Street 沿いに土地が買い占められ、その中央に商店街

が築かれたこと、その後1890年代に入ってミシガン湖畔沿いの北部側に高級住宅街が開発されたこと、1890年代後半に、それまで高級住宅地であった都心の南側に移民労働者が流入し、20世紀に入ってから、高級住宅街が南西および北部に拡散していった歴史と合致している。その後、大恐慌から第二次大戦直後にかけての時期、どのブロックでも公園数は伸び悩んでいる。戦後において特徴的なことは、北部と南部西が1950年までに他と比べてかなり数を増やしていること、南部東は1970年代前半まで安定して毎年10前後（低いレベルと言えるだろう）数を増やしていること、そして中央西が1950年代と1970年代に極めて高い伸びを示していることなどである。特に南部についてみた場合、第二次大戦を挟んで東と西の数が逆転していること

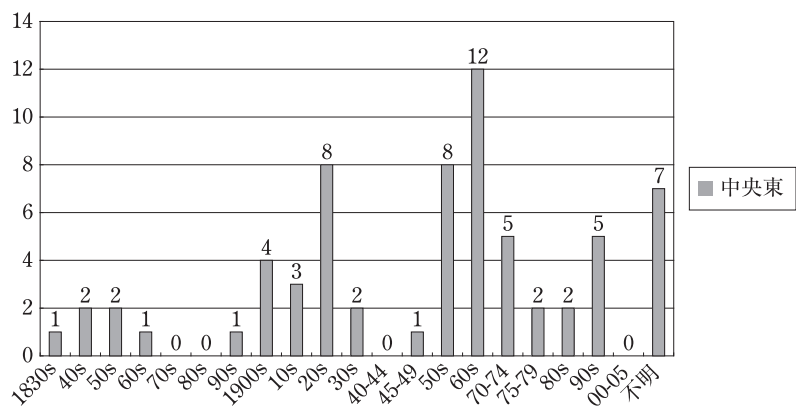


図6 中央東公園設立年

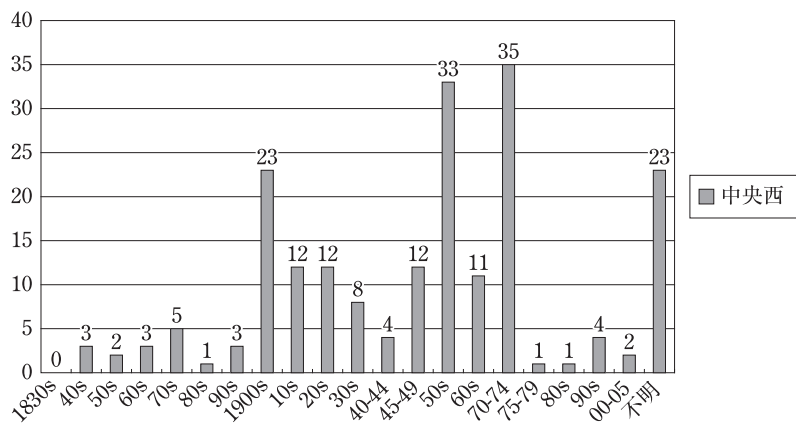


図7 中央西公園設立年

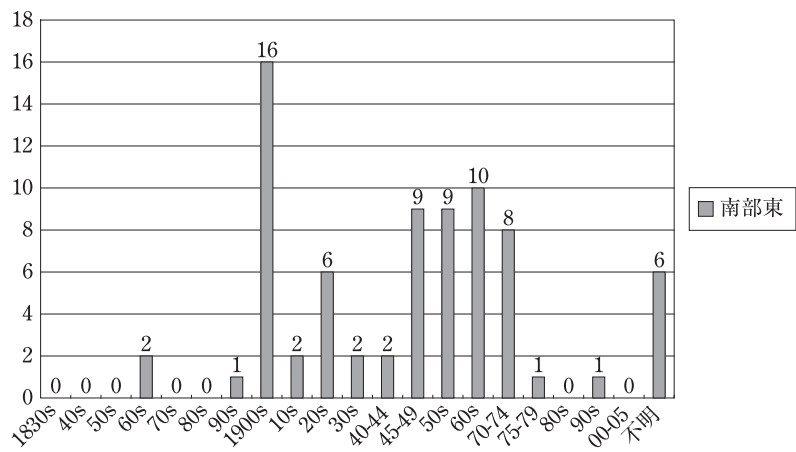


図8 南部東公園設立年

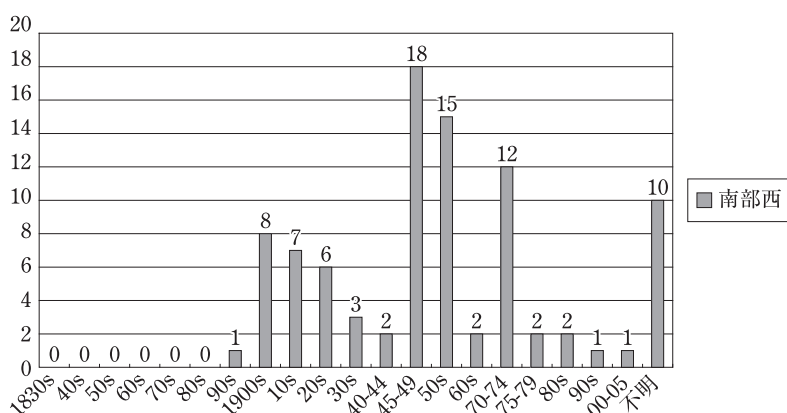


図9 南部西公園設立年

が分かる。これは南部西が南部東に比べて相対的に数を増やしているからであるが、しかしそれは戦後のところで南部が北部や中央西に大きく差を広げられていることも示している。戦後からこの時期にかけての動態は、先ほど触れたシカゴ市の再開発事業、産業や労働、公民権運動などの社会運動と民族の細かい動きを加味して分析していくことが課題となろう。

残念ながら、現在のところ設立年が不明な公園が67ある。これについてはそれぞれ個別に調査を進め、設立年を特定していく必要があるが、歴史的に古いものとは考えにくく、恐らくは戦後の再開発事業によってつくられたものか、1980年代以降のものであろう。1980年代には民間資本による開発が平行して進められた可能性も高く、また他のレジャー産業も都市に多数の消費的娯楽施設を建設しただろう。そういった関わりで公的な公園数が伸び悩んだか否かについても見ていく必要があろう。さらに、荒廃した公園がストリート・ギャングによって支配されたり、民族同士の抗争の場となったりしたため、シカゴ公園局が公園の再生計画を図ったのがこの1980年代の時期でもあった。それゆ

え、現状を理解する上でもこの設立年特定の課題は重要である。

(3)公園併設施設の状況

次に公園併設のスポーツ・レクリエーション施設⁸⁾の分布状況を見るために、以下に施設ごとの検討を行っていく。表3は、ブロック別の施設数を表したものである。水泳プールに関してはそれが子ども用のミニプールか屋内・屋外かといった内訳も示してある。野球場を併設している公園は、現在のところ212存在している。体育館や運動広場⁹⁾などの多目的に利用可能な施設に比べて、単独種目である野球（もちろんソフトボールがシカゴで発祥したことや野球と兼用で利用できることも考慮しなければならないだろう）の施設数が多い点は注目すべきところである。テニスコートなどは一施設で数面あると考えられるので、その施設数について論じる場合は、更に対面積比のプレイ人数なども算出せねばならないが、野球のプレイ人口が多いことは明白である。

その他は、運動広場を除きどの施設もブロック間の差がこの表からは見ることが出来ない。

表3 ブロック別運動施設数

施設 ブロック	野球	フィットネス・ センター	水 泳 プール	プール内訳			テニス コート	体操場	ボクシン グ施設	運動広場	噴 水 プール	水遊び場	会議室	講堂	体育館	遊歩道	ゴルフ場*	計
				ミニ	屋内	屋外												
北 部	53	8	19	1	10	8	45	4	4	85	37	5	41	9	37	9	2	358
中央東	13	4	5	0	2	3	9	0	1	0	2	0	9	0	7	8	0	58
中央西	67	16	40	3	17	20	31	2	8	22	44	16	41	8	48	13	2	358
南部東	31	9	15	0	6	9	22	2	2	0	19	4	17	1	18	8	2	150
南部西	48	7	15	0	8	7	29	0	1	0	14	5	22	4	22	6	1	174
合計	212	44	94				136	8	16	107	116	30	130	22	132	44	7	1098

*コースと練習場ないしはミニゴルフが併設の場合は一つとしてカウントした。

中央東の施設数が相対的に少なくなっているが、そこがビジネスの中心であり、居住人数や相対的な面積比によるものと考えられる。しかし、運動広場に関しては、ここで見ても北部が85、中央西が22で、その他中央東はともかく、南部には東にも西にも一つも存在していない。このことについては検討する余地があろう。

表4は、合計107の運動広場が併設されている公園がいつ設立されたものであるか、ZIP codes 別に並べたものである。全体として、特に設立年にばらつきがあるようには見えないが、満遍なくというよりは、同じ地域にある特定の時期に続いているようにも見える。運動広場が、ボストンの砂場から始まったレクリエーション運動における基本的施設であることを考えると、むしろ運動広場が全くない地域があることの方が問題となるかもしれない。運動広場は、学校・幼稚園や保育といったものと切り離しがたく結びついてきているし、もはや運動広場が公的な場として存在しないのであれば、そのことを生活や教育環境の問題として分析していくことが課題となろう。しかし、ここでは運動広場の存在する2つのブロック北部と中部西にどのような傾向があるのか2000年のセンサス（国勢調査）から見ていきたい¹⁰⁾。しかしその前に、一つ注意深く見ていかねばならないのは、中部西に分類された22の運動広場が ZIP

code 60614, 60647, 60639の場所に存在し、それがいずれも北部に接する位置にあることだ。そもそも北部と中央西という2つのブロックは、筆者が Diversey Avenue で区切った線の北側と南側の関係にある。図1で既に図示しているが、Diversey Avenue はコミュニティ・エリア18, 19, 20を北側と南側に分割し、またコミュニティ・エリア22と7は分割こそされていないが、北部と接する場所にある。したがって、コミュニティ・エリアを一つの意味あるかたまりと考えるならば、107の運動広場はシカゴ市の北部に集中しているということになる（この場合、筆者の区割りに若干の修正が求められるだろう）。さて、運動広場が存在するシカゴ市北部地域一帯に共通するものは何か。センサスのデータを見る限り、白人が相対的に多いということは考えられたが、民族的なものというよりもむしろ高学歴と高収入という2つの要因で特徴づけられるように思われた。さらに検討していくべき重要な課題であろう。

冒頭でも触れたシカゴ市公園システムの高い評価は、シカゴ公園局が市民の公的レクリエーションのために莫大な予算を確保し、それを市民の求めるサービスのために有効に活用してきた現れであろう。シカゴ公園局の歴史や組織の特質をふまえた議論も機会を改めてする必要がある。今回ここでいえることは、1934年に多

表 4 運動広場併設公園設立年

ZIP 設立年代	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	00-05	不明	計
60613	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	4
60618	0	1	2	1	1	3	1	0	1	0	0	0	0	10
60625	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
60626	1	1	2	0	1	0	2	0	2	0	0	0	2	11
60630	0	0	1	4	0	0	1	0	1	0	0	0	0	7
60631	0	0	1	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	5
60634	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4
60640	0	0	1	0	0	0	2	0	6	0	1	0	0	10
60641	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	4
60645	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	5
60646	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	1	5
60656	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
60657	0	0	0	0	0	1	2	1	2	0	0	0	0	6
60659	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3
60660	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	4
*60614	0	0	1	0	0	1	0	3	1	1	0	0	0	7
*60639	0	0	1	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	7
*60647	0	1	1	2	0	0	1	2	1	0	0	0	0	8
合計	2	4	16	16	9	11	13	7	20	3	1	0	5	107

* 中央西のブロックに区分けされた ZIP code (Diversey Avenue の南側に接する地域)。

くの独立組織が統合されてシカゴ公園局として動き出す以前から、すなわち百年以上に渡って、常に流入する移民の問題やその関わりで生み出される社会問題と向き合い、課題を持って継続的な取り組みが行われてきた、あるいは行わざるを得ない状況がシカゴ市には存在したということである。そして、そういった中で個々の公園が数十年から百年以上のスパンで、併設する運動施設やプログラムの内容を変化させながら存続してきたことを意味している。(今回そのことについて分析できなかったが、施設やプログラムの変遷について把握することは重要であり今後の課題としたい)。

筆者は、シカゴ市の公園およびスポーツ・レクリエーション施設とそのプログラムサービスの現状を解明しようとするところから本小論を始めた。しかし、それはシカゴ市の輝かしい取り組みの歴史から成功の原因を探るといったと

ころに繋がるものでは必ずしもない。それはむしろ、そこでの形態や分布の状況、その場所をめぐってなされた実践の数々、その場所において日々営まれてきた活動とそれらをめぐってどのような意味や価値のぶつかり合いが見いだせるかということに主眼をおいている。繰り返しになるが、本研究は現況を捉えつつ、それを歴史軸の上に置き、公園施設の設立から現在までの間にその場所をめぐってどのような人間の営みがあったのか、そこで行われたスポーツやレクリエーション活動がいったいどのような意味を持っていたのかを明らかにしようとする試みである。以下、本小論の後半部分では、どのような事象ないしは端緒に目を向けるべきか、そしてそれにどのような視角からアプローチすべきなのかを示していきたい。

2. 都市計画の思想と公園の物理的配置

シカゴ市は1837年にその市政が施行された。それによってひとつの土地投機ブームが生み出されている。鉄道が最初に敷かれたのは1848年であるが、それ以前にすでに五大湖と河川の交通は発達しており、人口が大きな伸びを示している（表1参照）。そもそもネイティヴ・アメリカンから一握りの土地を購入した後、僅かな期間で20世紀初頭に急速な繁栄がもたらされたわけである。それが他に類を見ない都市空間と都市文化を生み出していったことは想像に難くないだろう。それまでどのような共存も棲み分けも行われていなかった場所に、異民族・異文化が流れ込む。そこで起こったお互いのぶつかり合いはどのようなものであり、いったいどのように制御されたのであろうか。社会問題化した現象や環境の悪化はすでに住居を構えていた人々にとってはどのようにとらえられ、どのような対処がなされたのだろうか。共棲の道が探られたのか、住み分けの道が選ばれたのか。シカゴ市では公共空間としての公園が、またそれを社会事業として実現していくための都市計画が必然的に、そして特別な意味で重要になっていったといえるだろう。

シカゴ市は1893年には、コロンブスの新大陸発見400年を祝う、「シカゴ万国博覧会 [World's Columbian Exposition]」を開催するまでになっていたが、この博覧会会場の空間設計を中心的に担ったのが近代都市計画の先導者として認知されているD・バーナムであった。しかし、建築家としての彼は、むしろ旧ヨーロッパをモデルとした古典主義者として評価されていた。したがって、彼が関わって万博会場のミシガン湖

畔につくられた大理石の建造物は、近代都市としてのシカゴを象徴するものであり、威厳を持って「ホワイト・シティ」と呼ばれた。つまりそれは新しい世界の象徴というよりはむしろ、ヨーロッパから伝えられた白人文明の象徴として捉えられていたのである。更に、それとは別の意味で、彼の博覧会会場の仕事は、公共建築と公共空間の一体設計をデザインの根底に持ち、秩序を持った都市計画の可能性を見せるものでもあったという。混沌とした世界のなかで、実際にそれをきっかけとしてダウントウン地区の改善を目指して美しさと効率性を求めた「都市美化運動」が、その後シカゴで生み出されている。いわゆる「シカゴ・プラン」とはそのD・バーナムとE・ベネットによって1909年につくられた近代的な都市計画であり、この「都市美化運動」の延長線上にあったとされるものである。

「シカゴ・プラン」は、翌1910年に市当局によって採用されたが、その「提案の多くは、都市の発展に脅威を感じ、また階級ごとに土地を分離・区別して下層階級の住宅や産業を自分たちの居住地域の外に維持したいと考えていた中・上流階級のひとびとによっても支援された」（斉藤・岩永：1996, 147）という。「また都市が発展するにつれて商業・工業施設やスラム（都市のなかのムラ）が住宅地域へと侵入することを地帯区分の立法化によって防止することは、シカゴの中・上流階級が『シカゴ・プラン』以降の都市計画に期待したところ」（斉藤・岩永：1996, 149）でもあった。そうした地帯区分による分離、住み分けと同時に、公園が居住における境界線としての機能を持つことから、都市計画の実質的なプランとそれが持つ思想部分の理解は極めて重要である。公園は都市

のインフラストラクチャーでないにしろ、それがどのような経緯で形成・配置されてきたかを検討するとき、都市計画は最も基本的かつ重要なものであろう。物理的な空間が、資本主義の進展によってどのような集積を伴い、さらにどのような思想でその後の発展が計画されたのか、公園はその過程を見る上で重要な指標といえる。そもそも、“City in a Garden”というモットーで市政が始まったシカゴ市であったので、ニューヨークなどの大都市に遅れをとっているという認識から、1880年代には、市の境界を囲むような形で景観公園を中心にした“boulevard system”を作り上げている。しかし、先に述べた土地投機ブームの後に、資本主義の集積過程における移民の流入によって都市の内部における生産拠点と居住に急激な変動を見ることになるわけである。私的に所有された土地も含めて、シカゴ市の開発はまさに混沌とした状況にあった。

シカゴ市公園の物理的配置を見るとき、まず資本の集積過程との関わりで考えていかねばならないことが指摘できよう。そして、都市計画を、その集積を実現するためのものとして分析していく必要がある。特に19世紀後半までの段階ではその点が重要であり、「都市美化運動」と「シカゴ・プラン」に関連して公園の問題を考えていくことが求められよう。そしてまた、もう一点付け加えておくならば、シカゴ市の不動産業者の動向は、公園用地と居住の関係をおさえる上でたいへん重要だと言えるであろう。

3. 移民対策のための公園行政

公園の配置は都市計画の思想が先行して決められる側面と、そこで営まれる活動がどのよう

なものであり、それが社会的にどのような意味を持ってくるか、という見通しによって決まる側面がある。すでに共同体が成立している土地であれば、公園も含めた公共空間は、後者の側面によってほぼその中央に存在するようになるだろう。そして、その共同体が緩やかに拡張するのであれば、後者の側面が前者の思想に生かされる形で都市計画が実行されることに繋がっていく。すでに見たような資本の集積と移民労働の移入により形成された都市の中でも、際だって特徴的なシカゴ市では、公園が初期の段階では資本の集積過程における矛盾を和らげる装置として配置が決まったと考えられる。それは公園でありながら公的なものとしては機能していなかった。しかし、その段階から転じて全米でも初めて公的レクリエーションとの関わりで公園行政が動いたのはなぜだったのか。それは、公園で行われる活動に極めて重要な社会的意味が見いだされたからに他ならない。シカゴ市では、資本の集積過程において生産拠点の周囲に移民労働者の集住を必要としたが、その居住に移民対策のための小公園のシステムが作り出されたのだ。

20世紀に入って移民の集住がある程度固定された中で、物理的な空間、美化や分離境界線としての公園でなく、移民の居住や労働生活における矛盾を解消していくためのシステムとして行政がつくりあげた公園を見ていく必要がある。それは、シカゴ市公園研究における2つめの重要な視点である。そのシステムとは、南部公園委員会¹¹⁾がつくった10の「シカゴ南部公園」¹²⁾とそこで提供されたプログラムのことを指している。これらの公園は、単なる運動広場併設の公園ではなく、C.D. バトラー（バトラー：1962, 99-100）の記述では以下のようなも

のであった。

1903年、南シカゴの密集地域に小レクリエーション公園を造るために、500万ドルの債券発行が決議された。これらの公園の建設—このうち10箇所は1905年に開園した—をテオドル・ルーズベルトは、“アメリカの市に市民のなしとげたもののうち最も注目すべきもの”と呼んだ。これらの公園は、公園や児童遊園建設に新たな基準を与えることになった。それまでの施設はほとんど戸外のものであり、1年のうち数箇月しか使用されず、おもに運動や体育活動向きに設計されたものであって、近隣の人々が必要としているものとはあまり直接関係がなかった。しかし、一方、シカゴの南公園（「シカゴ南部公園」＝筆者）は1年中を通じてあらゆる年齢の人々のあらゆる興味を満たすことができるように設計されたのである。これらの公園は広い範囲のレクリエーション活動に使用できる戸外、屋内の設備がなされ、それを利用する近隣の人々の幸福で健全な暮しのために、少しずつ設備が加えられるようにされていた。

これらの公園は7～300エーカーにわたって大きさはいろいろあり、レクリエーション活動に大部分が使用されていたが、計画に従った植樹によって非常に美しい外観を保っていた。野外ホール、ステージや衣装室もある集会ホールなどがあり、男子用、婦人用の体育館、シャワー、ロッカー室、食堂、クラブ室、市立図書館の分館まであった。戸外設備も平等にゆきわたっており、設備の完備した児童遊園、ゲーム・コート、その他の設備が完備した男子用と女子用の体育館、種々のゲームやスポーツのためのフィールド、野外音楽堂、屋外水泳プールが設備された。野外大ホールや児童遊園は、指導主事の下に訓練された指導者がおり、これらの施設が最大に活用されるように

働いていた。

また、この「シカゴ南部公園」の一つであるベッセマー公園〔Bessemer Park〕設立経緯について、シカゴ公園局は移民対策に関わって以下のような説明をしている¹³⁾。

アメリカンドリームを実現する希望を持って莫大な数の移民がシカゴに到着した。だが、多くの者は耐えがたい生活と労働条件の中におかれた。市内にすでに存在していた公園はどのような救済・援助を提供するにも遠すぎた。（中略）革新的な公園は、美しい景観を持った休息スペースを提供しただけでなく、公衆の水浴び場、市の最初の図書館分館、授業や職業訓練、そして、安い温かな食事、ヘルスケアや様々な種類のレクリエーション・プログラムを提供した。

また、デービス・スクエア公園〔Davis Square Park〕にはクラブハウス、ロッカー、カフェテリア、クラブ部室、会議室、教室も備わっていた¹⁴⁾。

このように、「シカゴ南部公園」は公的資金によってつくられたシステムとしては最初のものであったが、同じ南部公園委員会が実験的につくったマッキンレー公園（第25代大統領マッキンレー暗殺の後に、彼の栄誉を讃えてこの名が付けられた）という極めて重要な先例があったことはあまり紹介されていない。また、1899年に特別公園委員会〔Special Park Commission〕が設立され、市長によって、市内の最も人口が密集した地域に公共の運動広場をつくるための実態調査を命ぜられたことも、十分それが意味するところをふまえた考察はなされていない。

こういった公園施設における公的レクリエー

ションの高まりは、すでに1885年のボストン市の「砂場運動」から始まっていた。しかし、この運動の流れが、これまで見てきたように、シカゴ市において移民対策の公園行政として動き出すところに注目すべき点があるといえよう。そしてそこに至る過程には、もう一つ見逃すことができないシカゴ市固有の流れ、ジェーン・アダムズを中心とするハル・ハウスが存在していた。実は、シカゴ市で特別公園委員会が動き出す以前の1892年に、すでに「ハル・ハウスが市と連絡のもとにモデル児童遊園を造つ」（バトラー：1962, 97）ている。その翌年の1893年につくられた大きな滑り台、ブランコ、シーソーなどを備えた運動広場は後の市営公園につながったといわれている。

これらの「シカゴ南部公園」に先行するいくつかの実験的な試みが、いかにして公的な公園システムとして実現していったのかを移民対策行政との関係で明らかにすることは本研究において極めて重要かつ最大の課題であると考えられる。

4. 意味空間としての公園

移民労働者に対して、単に憩いの場を与えるというだけでなく、スポーツ活動を含むプログラムサービスに積極的に参加することが保障され、その方向性が現実化したことは、彼らによりアメリカ市民となってもらうことが望まれていたこと、それが社会秩序を保つための重要な課題であったことを示している。それは、資本主義の集積過程における拠点の開発によって生活環境が劣悪なものになったというだけでなく、シカゴではそれに起因する様々な矛盾が移民たちの生活環境不適應という形で現れ、資本

主義とそれを支える都市の発展にとって、移民の市民参加＝アメリカ化が絶対条件となったということであろう。さらに移民が、19世紀末から賃金労働者として呼び込まれて都市に定着した人々であることを考えると、移民にとってよき市民になるということは、詰まるところよき賃金労働者になるということと同等であり、逆に資本にとってみれば労資間の紛争を調整することは、移民がアメリカ化して賃金生活者として都市空間に統合される必要があるということである。行政が公園を移民対策の場として考え、どのような教化のプログラムをもってアメリカ化を実現しようと考えていたかといった分析の必要性を感じる一方で、公園に様々な不満や要求を持った移民が集い、その場でどのような現実があったのかという点に目を向ける必要があると考える。なぜなら、現在でもシカゴ市には極めてはっきりとした民族のモザイクが残されており、公園行政による移民対策の効果と実態について疑問が残るからであり、また、公園やそこでのスポーツ・レクリエーション活動がどのような同化・アメリカ化の役割を果たしたかということに考え及ぶからである。

母国を離れた移民がアメリカに移住する際、必ず同一民族で集住するところからその生活は始まる。そこでは言語の問題だけでなく、共通に行える行事や文化活動に参加する。したがって、アメリカ化とはそのような民族コミュニティに暮らす移民が、アメリカ社会に同化していくことに他ならない。そしてこの「同化とは、個人ないし集団が、他の個人あるいは集団の記憶、情操および態度を獲得し、その経験および歴史を共有することにより、彼らとともに共通の文化生活に統合されていく、相互浸透および融合の過程である」¹⁵⁾。そして、同化にはいく

つかのタイプがあり、その程度も問題となるが、ここでは以下のような斉藤の同化に対する考え方を参考にし、住み分けをしながらアメリカ社会に同化していく移民の姿を公園での活動、そこでのスポーツ・レクリエーション活動のなかに見ていけばよいのではないかと考えている（斉藤：1998，103-4）。

都市に流入した移民は、人種のるつぼのなかでひとつに溶け合ったわけではなかった。かれらは出身地別に集住区を形成する。たとえばリトルイタリー、リトルロシアといった小集落を形成して暮らした。したがってかれらはいきなりアメリカ国民になったわけではなく、まずそれぞれの民族共同体を形成し、その出身国の民族意識を醸成する。移民は様々な結社をつくった。たとえば当時2000万人のゲルマン系アメリカ人は6500の地方結社に組織されていた。イタリア系アメリカ人は887の支部をもっていた。だがこの出身別の民族的結社は、かならずしも分離主義を唱えて米国社会から孤立していたわけではない。むしろそれらの結社は、移民が分離主義を克服し、アメリカ社会に同化するための道であった。移民がアメリカ化する第一歩は、かれらが直接にアメリカ人になることではなく、まず地方出身の外国人であることをやめることであった。…（中略）…

移民はこのようなプロセスを経てアメリカ国民として生成する。民族的単位ごとの集住は、移民が国民として生成するための不可避的な道程であった。たとえばシカゴでは、多様な移民がたがいと隔離して住み分けを図る。その集住区で、各国の移民はそれぞれの生活条件や慣習をそのまま温存した。かれらはたがいに交差したり溶け合うことなく併存した。

彼らが参加するレクリエーション・スポーツ活動のなかにどのようなものが見いだせるか、それは今後の課題である。しかし、移民がよき市民として存在するためによき労働者であることを求められ、テラーの管理法によってその労働スタイルの変更を求められたとすれば、労働力上の統合だけでなく、労働生活を背景から支える生活上のリズム、その日常的な積み重ねによって成り立つ都市や地域社会への統合を求めるものとなろう。このように考えれば、労働に対する余暇の部分、日常生活における労働時間外の活動に目を向けていくことは当然必要となろう。

ここでは移民問題の目に見える部分、とりわけ社会問題への対応策として公園の設計および施設やプログラム提供、またその研究とは別の問題として3つ目の提起をしようと試みているわけである。すなわちそれは、公園とそこに併設された施設、またそこで提供されるスポーツ・レクリエーション活動を含むプログラムサービスをアメリカ化の装置として考えるということである。そういった視点に立って以下にもう一度セツルメントについて考えてみる。

ジェーン・アダムズのハル・ハウスその他のセツルメント・ハウスは、一つのコミュニティセンターとして、移民のスラム街に造られ、社交クラブを後援し、幼稚園を運営し、コーヒー・ハウスや体育館、またアート・ギャラリーを経営していた。また、それらは図書館機能を持ち、教育とレクリエーションの機能を移民たちに提供していた。しかし、これは単にそこに集う移民の救済や教育だけでなく、この運動に関わり、住み込みで活動する中産階級や学生を啓蒙する場でもあった。つまり移民貧困層の要求や関心が、その場で混じり合い触れ合うこと

によってアメリカ社会と相互に理解・浸透する実態があった。「シカゴ南部公園」もやはり同じように、コミュニティ・センターとして機能し、提供されるサービスもほぼハル・ハウスと同じかそれ以上で、スポーツの組織的な指導が行われていたことは改めて指摘しておくべきであろう。

近隣公園はシカゴの労働者階級地域において、多くの必要とされる公的なサービスやスペース、例えばシャワーや水泳プール、テニスおよびバスケットボールコートなどを提供してきたが、その根本には「地域の問題を議論する場」としての集会所を求めるということがあった。意味的空間としての公園とは、行政の施策の場としての公園に対して、そこに集まった主体者としての移民がそこで自分たちのコミュニティとして中心となる活動や行事を通して、民族のアイデンティティを形成する場として考えられる。こういった視点で公園という場を理解してこそ、そこで行われるスポーツ・レクリエーション活動のアメリカ化における役割・意味について考えることができるのではないかと考えている。

おわりに

小論では、シカゴ市における公園の設立時期と配置の関係を検討する中で、まず公園数が20世紀初頭に急激に増加していること、大恐慌や第二次大戦期に足踏みしつつも、戦後から1970年代前半までのところでその数を大きく増やしていることが確認できた。しかし、ブロック別に見ると、その配置が南部で著しく少ないこと、運動広場がほぼ北部にしか存在しないとい

う偏りを確認することができた。

こうした発展上の特徴を、ここではシカゴ市の資本主義的発達およびその具体的な現れとしての都市の拡張、そして移民労働者に関わる諸問題とその公的な対応策という点に目を向けて見ていく必要があることについて論じ、具体的に：

- ① 公園の物理的な配置を都市計画との関わりで見えていくこと、
- ② 公園行政における移民対策の問題として併設施設や提供されるプログラムサービスを見えていくこと、
- ③ 移民がアメリカ社会と交わる場所として、「アメリカ化」に関わった「意味空間」として公園を見ていくこと、

という視点を提示した。

これまでもシカゴ市の特徴と問題、また公園の位置づけについては触れてきたが、小論をむすぶにあたって、公園を含む公的な領域がすでに実践的な社会科学の対象として研究され、多くの示唆に富んだ資料が残されているという点に触れておきたい。

移民対策の一つである「シカゴ南部公園」の建設という公園行政に先行して、ハル・ハウスで取り組みが行われていたことは既に触れた。ハル・ハウスおよびジェーン・アダムズとシカゴ学派の社会学との関係については十分に解明されているとは言えないが、両者が密接に関係を持ち、その社会調査の手法や成果を共有するだけではなく、シカゴ学派の第一世代から第二世代にかけては、プラグマティックな学問として社会事業に深く関与していたことは知られている。このように、セツルメントと大学研究者

の相互関係が築かれることはシカゴ以外ではあまり見ることができないと思われるが、それはまさに特殊な社会環境下にあった大都市シカゴの産物であると言えよう。特別な社会改良運動や社会学を生み出し、題材を提供してくれるシカゴであるが故に、社会的存在としての公園について研究する意義があると確信している。しかし逆に、ハル・ハウスのレジデントやシカゴ学派の研究者たちがそこで対象に向き合い、優れた社会調査・モノグラフを残してくれたからこそ「意味的空間」としての公園について研究を進めることができるとも言えよう。また、別の機会に譲ることにしたいが、それらはシカゴ市の公園をめぐる様々な現実をリアルに捉える上で必要不可欠なものである。

註

- 1) ハル・ハウスはアメリカ合衆国で最も古いセツルメントではないが、最も有名なものとして知られている。ジェーン・アダムズらによって1889年に移民の滞留地となっていた旧ハル氏邸宅を拠点として実行され、慈善事業、都市環境の改善運動、婦人・児童の保護立法制定などに貢献した。
- 2) シカゴ公園局は、シカゴ市の公園と併設のスポーツ・レクリエーション施設を統轄する組織であり、1934年に独立組織の統合によってつくられた。そのインターネットの公式サイト（ホームページ：<http://www.chicagoparkdistrict.com/>）が本小論で公園の数を特定し、個々の公園の情報を入手するために利用された。同サイトでは、それぞれの公園ごとにページが作られ、情報が整理されている。今回、公園の設立年として確定したのは、それぞれの歴史に関わる記述の中から、用地が私有地から市営の公園用地として寄付、譲渡・売買された年代を基準としている。これは、本小論の目的が主に公的レクリエーションのための空間がどのように配置されてきたのかということに主眼をおいているためである。592の公園のなかには、海水浴場、野球場（合衆国ではball parkとも言うが）、ゴルフ場も含まれているが、緑地あるいは景観的な要素が備わっていること、またシカゴ公園局の管轄であることから公園として考えた。
- 3) ZIP [zone improvement program] は、5けたまたは9けたの数字コードで、最初の3桁は州名と配達地を、あとの2桁は郵便区または郵便局を示している。イリノイ州シカゴ市は最初の3桁が606になっている。
- 4) ループ [Loop] は、コミュニティ・エリア32番の地域であり、またシカゴ市のビジネス街の通称でもある。シカゴ川本流の南側に位置している。
- 5) コミュニティ・エリアは、シカゴの都市研究でロバート・パークらがセンサスの区割りなどと併せて利用したことでも知られるが、自然環境を伴った地理的条件が存在するが故にコミュニティが成立する上で一つの境界をつくる可能性が高い空間である。また、ワード [Ward: 区] という行政単位（時代や社会とともに変化する領域）もシカゴ市には存在している。コミュニティ・エリアは全部で77あるが、その内パーク [-park] と付くものが19、スクエア [-square] と付くもの3あり、庭園あるいは公園のなかに街をつくりたい、安寧な環境を手に入れたいという願望があったことを窺わせる。
- 6) ニューディール政策による公共事業のなかに公園建設も含まれていた。
- 7) プレイロット [play lot] は幼児公園などと翻訳されることもあるが、概して小規模な広場を指すことが多い。
- 8) ゴルフ場にはドライビング・レンジやミニゴルフ場が併設されている場合もあり、その場合、それらをまとめて一つの施設として数えている。ドライビング・レンジやミニゴルフ場、その他会議室など施設をすべて個別のものとして数えると、施設数の合計は1,102で、ゴルフ場がドライビング・レンジやミニゴルフ場を併設しているケースは4件あり、それを一つの施設と数えると合計は1,098ということになる。
- 9) 運動広場 [playground] はプレイロットと比

- べると大きい、それぞれの広さや用途は実に多様である。これまでも運動広場あるいはそのままプレイグラウンドという使い方がされてきたが、ここでは運動広場がより適切であると判断した。
- 10) 合衆国のセンサスは10年ごとに行われている。ここでは、2000年のセンサス・データをシカゴ市が地図に落としたものを利用した。シカゴ市 (City of Chicago) の公式サイト (<http://egov.cityofchicago.org/city/webportal/home.do>) を参照されたい。
 - 11) 南部公園委員会 [South Park Commission] の設立は1869年で、同じ年に西部公園委員会とリンカーン公園委員会が設立されており、独自の活動を始めていた。
 - 12) これまで、日本では、「南公園」あるいは「南部公園」と翻訳され、紹介されてきたが、個々の公園は特定されず、その研究意義も十分納得のいくものではなかった。ここでは「シカゴ南部公園」と表記する。「シカゴ南部公園」は、本小論のブロック分けでは、中央東に1つ (Armour Square Park)、中央西に4つ (McGuane Park = 当時は Mark White Square Park, Davis Square Park, Cornell Square Park, Sherman Park)、南部東に3つ (Russell Square Park, Bessemer Park, Palmer Park)、南部西に2つ (Ogden Park, Hamilton Park) となっている。その配置はループから南方に向かってかなり広い範囲で存在している。
 - 13) ベッセマー公園の設立経緯についてはシカゴ公園局のサイトより (参照: 2007/12/26)。
 - 14) デービス・スクエア公園の設備についてはシカゴ公園局のサイトより (参照: 2007/12/26)。
 - 15) パークとバージェスの同化の定義だが、引用は (Loy, Kenyon, and McPherson, 1988, 255-6) の筆者翻訳のものである。
- 引用・参考文献**
- 秋元律郎, 1989, 『都市社会学の源流』有斐閣。
- , 1997, 『市民社会と社会学的思考の系譜』御茶の水書房。
- アレン, F・L (河村厚訳), 1979, 『ザ ビッグ チェンジーアメリカ社会の変貌—1900~1950年』光和堂。
- 小田切毅一, 1982, 『アメリカスポーツの文化史—現代スポーツの底流—』不昧堂出版。
- 川口智久, 1973, 「アメリカにおけるレクリエーション運動とその意義」『一橋大学研究年報 自然科学研究』15: 59-95
- 斉藤日出治・岩永真治, 1996, 『都市の美学 (アーバンニズム)』平凡社。
- 斉藤日出治, 1998, 『国家を越える市民社会 動員の世紀からノマドの世紀へ』現代企画室。
- 橋川喜美代, 2003, 『保育形態論の変遷』春風社。
- バトラー, C・D (三隅達郎訳), 1962, 『レクリエーション総説 (第3版)』ベースボール・マガジン社。
- パーク, R・E / パーゼス, E・W 他 (大道安次郎・倉田和四生共訳), 1972, 『都市 人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会年
- 宝月誠・中野正大編, 1997, 『シカゴ社会学の研究—初期モノグラフを読む—』恒星社厚生閣。
- 本間長世編, 1984, 『大いなる荒野 大いなる都市』日本経済新聞社。
- 吉原直樹編著, 1993, 『都市の思想—空間論の再構築にむけて—』青木書店。
- Anderson, Jackson M., 1955, *Industrial Recreation*, McGraw-Hill Book Company (江橋慎四郎訳, 1965, 『企業とレクリエーション』ベースボール・マガジン社)。
- Bachrach, Julia S., 2005a, *Park District*, The Electronic Encyclopedia of Chicago, Chicago Historical Society, <http://encyclopedia.chicagohistory.org/pages/955.html> (参照: 2007/12/25)。
- , 2005b, *Playground Movement*, The Electronic Encyclopedia of Chicago, Chicago Historical Society, <http://encyclopedia.chicagohistory.org/pages/976.html> (参照: 2007/12/25)。
- Butler, George D., 1949, *Introduction to Community Recreation* (2nd edition), McGraw-Hill Book Company, Inc.
- City of Chicago, 2004a, City of Chicago Community Area Map, <http://egov.cityofchicago.org/>

- webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/commarea_num.pdf（参照：2007/12/24）.
- , 2004b, Zip Code Map, http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/zip_codes.pdf（参照：2007/12/24）.
- , 2007a, Chicago Demographics: Distribution of Residents Across the City (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Population_Total_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007b, Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education Level is Some High School Without Graduating (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_SomeHS_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007c, Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education Level is a Bachelor's Degree (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_BachelorsDegree_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007d Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education Level is an Associate's Degree (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_AssociateDegree_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007e, Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education is a Master's Degree or Ph.D. (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_GraduateDegree_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007f, Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education Level is a High School Diploma or G.E.D. (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_HSGraduate_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007g, Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education Level is Some College Without Graduating (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_SomeCollege_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007h, Chicago Demographics: Distribution of Residents Whose Highest Education Level is 8th Grade or Below (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Education_ElementaryOnly_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- , 2007i, Chicago Demographics: Distribution of White Residents Across City (as of the 2000 Census), http://egov.cityofchicago.org/webportal/COCWebPortal/COC_EDITORIAL/Race_White_1.pdf（参照：2007/12/26）.
- Curtis, Henry S., 1917, *The Play Movement and its Significance*, The Macmillan Company.
- Halsey, Elizabeth, 1940, *The Development of Public Recreation in Metropolitan Chicago*, Chicago Recreation Commission.
- Leonard, Eugene F. (2nd edition revised by McKenzie, Tait R.), 1927, *A Guide to the History of Physical Education*, Lea & Febiger
- Loy, John W., Kenyon, Gerald S., and McPherson, Barry D. eds., 1981, *Sport, Culture and Society: a reader on the sociology of sport* (second and revised edition), Lea & Febiger (糸野豊編訳, 1988, 『スポーツと文化・社会』ベースボール・マガジン社).
- Pacyga, Dominic A., 2005, *Playgrounds and Small Parks*, The Electronic Encyclopedia of Chicago, Chicago Historical Society, <http://encyclopedia.chicagohistory.org/pages/977.html>（参照：2007/12/25）.

Research on the Municipal Parks of Chicago: Issues and perspectives

KAWAGUCHI Shinichi *

Abstract: This thesis presents issues and the perspective of research on municipal parks of Chicago, in order to cultivate its theme: Chicago's municipal parks should be studied because of their great importance as public space in an expanding city with a process of capital-allocation: the wageworker-immigrants, who were dwelling in ethnically-homogenous or segregated areas, were able to assimilate into American society through the activities held in parks. In the first half of this thesis, the establishment of 592 existing parks in the city of Chicago is described and the location of each park is determined by ZIP code and address. Also, the sport and recreational facilities of each park are examined in terms of the number and the diffusion. Based on the data derived from the survey above, the characteristics of Chicago parks and the important issues and subject of this research are argued. In the second half of this thesis, the historical development of the city and the park administration is considered from three perspectives: 1) study of parks and their physical location in relation to municipal engineering; 2) study of programs and services provided by park governmental body, as immigrant-related policy; 3) study of parks as “semantic space” for “Americanization” — a space where immigrants encountered American society.

Keywords: Chicago city, parks, sports-recreational facility, immigrant, Americanization

* Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University